

アメリカによる広島、長崎での原爆投下実験のため、生き残った被爆者の苦しみは五〇年を過ぎた現在も続き、また終戦が遅れたため、ソ連の参戦となり、その結果としての朝鮮半島の不安定は五〇年後の今なお続いている。

アメリカは原爆を投下するただけに、天皇制を利用して戦争を三カ月も引き延ばしたのである。原爆を投下する目的は、この新兵器の人的効果を知り、戦後の世界支配に利用することであった。これに加えて、原爆開発に大金を使い果たしたことも関係する。成果を示さなければ、開発関係者は議会に査問されるとの恐怖を抱いていた。量産されるプルトニウム爆弾は不発弾になる可能性があったし、確実に爆発するウラン爆弾は一発しかなかったから、目標に投下して成果を示すことは絶対に必要だと判断したのだろう。

では、アメリカは、なぜ原爆を二個も落としたのか。戦後支配と議会の査問を避けるだけならば、広島だけで十分である。それは、広島に用いた原爆はウラン爆弾であって、長崎に落とした原爆はプルトニウム爆弾と種類が違うからである。しかし、このプルトニウム爆弾は爆発だけならアラマゴード砂漠ですでに成功している。それにもかかわらずこの原爆も投下したのは、このプルトニウム爆弾の民間人に対する殺傷効果も実験しておきたかっただけのことであろう。

他方、日本にとって、この戦争は、ドイツ降伏の一九四五年五月までは侵略戦争であった。しかし、それ以後も戦争を続けたのは、できるだけ良い条件で天皇と天皇制を守るためであった。天皇制との引き換えに、東京第三次空襲、沖縄戦争、広島と長崎の原爆、その他の都市や農漁村での空襲や艦砲射撃で、国民を数十万人も殺してしまったことをしっかりと記憶に留めておくべきであろう。

戦後、アメリカは、原爆投下によって日本占領作戦での米国の戦死者の数は大幅に減ったと、言い訳している。これが成立しないことは、アメリカ軍が、日本の軍事工場や鉄道・道路などを攻撃せず、その抗戦能力を温存して

米軍の死者を増やしていたことや、小倉（長崎）への原爆投下が、ソ連の参戦を気にして十一月から八月二〇日へ、そして八月二一日へ、八月九日へと何回も繰り上げたことから明らかである。

他方、日本も、降伏というみじめなできごとの面子を保つために、原爆を利用した。それは、天皇が原爆の災害の大きさを知り、戦争終結を決意したという話である。終戦当日の朝日新聞の一面トップの見出しは「戦争終結の大詔渙発さる。新爆弾の惨害に大御心」とある（朝日新聞一九四五・八・一五）。しかし、これが正しくないことは、御前会議などで降伏の結論がほぼ出た後に長崎被爆の報告が入ったことから明らかである。

不思議なのは、日ソ中立条約違反のソ連に対する戦後日本政府のあいまいな態度である。しかし、これはソ連による天皇制の容認との取引ではないかと考えられる。

第二次大戦の特徴は、ドイツ軍によるゲルニカ爆撃（一九三七）に始まり、日本軍による上海、南京、重慶（一九三七～三八）への無差別爆撃、イギリスとドイツの相互無差別爆撃、その延長線上のアメリカによる東京大空襲など日本全土への無差別爆撃である。そして、その極限としての広島、長崎（一九四五）への原爆投下は、アメリカ大統領と軍人たちの歴史に残る残虐な戦争犯罪である。

戦争なら何をしてもよいといふことにはならない筈である。

\* この文は雑誌「インバクシオン」（一九九八年八月号）に掲載された論文の最後の二頁です。たんぼパンフ57番「原爆投下の謎と日本核武装の疑惑」槌田敦著 三二頁 四〇〇円、二〇〇四年発行に全文が掲載されています。